

## 清乾隆朝にみる出版の権威性

谷 井 俊 仁

**要旨** 本稿は、清乾隆朝において出版がもった社会的権威について検討する。当時の出版に権威性が付与されたのは、非営利的な自費出版が主流だったからである。すなわち著者は、自らの威信のために出版し、人々も書籍は著者の人的権威の反映として理解した。そのような観点からすれば、当時の一大事業である四庫全書の纂修には、過去の書籍・著者の権威を、乾隆帝自らが格付けするという意味合いがあったことが理解される。

### 問題への視角

本稿は、清乾隆朝において出版がもった社会的権威について検討するものである。従来の出版史研究は、伝統的な目録学を継承発展させたものが多く、その基本的な関心は書誌学にあった。そのため出版と社会との関わりについては、書坊、蔵書家がとりあげられるものの、出版がもつ権威を明らかにしようとする社会史・政治史的な姿勢は希薄であった。それに対して本稿は、出版が乾隆朝の如何なる権威関係の現れであるのかを描き出す。

この時期を取りあげたのは、禁書の摘発、四庫全書の編纂といった事件があり、出版のもつ権威性が社会の前面に露呈させられたからである。しかもその間の事情を示す格好の史料、故宮博物院文献館編『清代文字獄檔』1931～1934年、上海書店1986年影印、および中国第一歴史檔案館編『纂修四庫全書檔案』上海古籍出版社、1997年がある。ともに当時の収書・禁書に関わる史料であるが、書籍と社会の関わりについての断片的な言及があり、それらを集めていくとかなりの量になる。档案本来の内容からすれば、このような読み方は邪道ではあるが、従来の目録学的な出版史研究ではあまり顧みられることのなかった史料群であるので、研究の新生面を開くことが期待できる（以下前者からの引用は文字獄……頁、後者は四庫……頁と略す）。

本稿の基本的視点は、書籍は評価されねばならず、その評価は著者・発行者そのものへの評価となるということである。むしろ著者・発行者への評価が書籍に対する評価という形を取って表現されると言った方がよい。評価される本体は、あくまでも人の方である。

この視点が重要なのは、禁書扱いになった者たちを指弾するときの論理が、このような形をとっているからである。たとえば『四庫全書総目』巻首に載せる乾隆帝による錢謙益、屈大均らへの批判の上諭がそれにあたる（乾隆41年11月17日）。曰く、彼らは明に殉じなかった。しかるに厚顔にも生きながらえて、明朝の名にことかりて吠えたて。人物が論ずるに足りないのだから、その書は存するまでもない（「其人実不足齒、其書豈可復存」）。

一方で、著者・発行者と書籍は違うという議論もある。通志堂経解出版に際しての乾隆帝の論旨に、納蘭成徳・徐乾学二人の品行はもとより取るに足りないが、「人を以て言を廃する」ことはしないという（乾隆50年2月29日上諭。陶湘『故宮殿本書庫現存目』所引）。

しかしいずれにしろ著者・発行者への人的な評価が、書籍に対する評価の枠組みを与えるの

は共通している。通志堂経解のように著者・発行者に対する否定的評価が、必ずしも書籍の否定につながるわけではないが、書籍の評価はそれを通じた上で下されるのである。

これは、現代の日本人にとって違和感を覚える論理である。我々は、著者の人間性に問題を感じても、それと著書を区別して考える方が普通である。著書が論ずるに足りないとするれば、それは著書自体の問題であって、著者の人間性との関連は二次的である。されば、著書＝著者という論理が横行する社会における書籍は、権威的な意味あいを帯びざるをえない。それは、著者の社会的な評価を反映し、その肯定的な評価が権威となるからである。本稿は、書籍のこのような側面を手がかりに、乾隆朝における権威のあり方を性格づける。

以上の目算のもと、第一節では出版が高価であり、それが可能なのは、資金ある者に限られ、しかも特定の地域のみであることを論ずる。第二節では、多額の経費のかかる出版は、営利的なものというよりは、著者・発行者が威信を求めるための非営利的行為であったことを論ずる。そこでは、書籍が彼らの人的権威と等価であり、そのために社会的影響力を果たすことが述べられる。第三節では、書籍が以上のような性格をもっている中で、営利出版は如何なる性格であったのかを論じ、基本的枠組みは非営利出版と同じであったことを明らかにする。結論では、人的権威の反映としての書籍の性格を再確認した上で、乾隆朝の四庫全書纂修がその枠組みにのって行われた政策であることが主張される。

我が国における先行研究としては、岡本さえ『清代禁書の研究』東京大学出版会、1996年がある。思想史の観点からする研究であり、本稿とは視点を異にするが、禁書を時代の幅広いコンテクストの中であつかっており、参考になるところが多い。

## 一 出版の値段

書籍が出版されるためには、著述がなされねばならない。しかし出版するに足る著述が、中国の全土で満遍なく執筆されていたかというところではない。

全国どこでも書かれていたのは、科挙の答案である時文である。時文は、政権による人材選抜の手段であるから、政権の権威が認められ、政権の秩序が保たれている地域ではどこでも執筆される。貴州省のような辺境においても「明経の士、時藝詩章のほか撰述あること鮮なし」と言われるように（四庫3頁）、時文だけは盛んに書かれている。

しかしそれ以外の著述となると、辺境諸省ではおおむね低調である。たとえば陝西省は文化が素朴で（「人文樸陋」）、官僚を出す旧家にもありふれた経書史書以外善本は無く、また著作する者も少ない（「鮮著書之人」四庫1447頁）。貴州省も僻地にあるので、文化が洗練されず底も浅く（「文風粗浅」）、著作する者は少ない（「鮮有著作之家」四庫1453頁）。陝西とか貴州では、時文以外の著述に対する関心が薄い。

それでは旺盛な著述活動のなされる地域には、どのような特色があるのか。たとえば江蘇省は、蔵書の中核地であり、同時に「好んで記載・著作を為り」、文集や書簡を出版に附す者が多い（四庫571頁）。江蘇省において著述と出版は一体である。そこでは旺盛な著述活動が、旺盛な出版活動をもたらしている。

しかし著述と出版とでは、社会的な広がりが違う。著述は紙筆があれば個人だけでもできるが、出版するためには版下原稿を書き、字を刻んで印刷し、製本してもらわねばならない。これらは専門の職人が必要であるし、出版に伴う様々な物品が入手できる流通網の整備も不可欠である。このような諸条件が前提となれば、著述活動の旺盛さが、必ずしも出版業の旺盛さと

一致しないことは容易に理解される。具体例を挙げれば湖南省である。ここは、著述活動は盛んであるが、出版活動は低調である。

巡撫の李湖によると、湖南省の士人は軽薄で、妄りに著述を誇るところがある。書籍を著したり編纂したりすると、書名を府志・県志に掲載して見せつけるのだという（四庫 960 頁）。巡撫の劉墉が乾隆 46 年 9 月 25 日に提出した禁書リストにも、全面廃棄すべき著作のうち湖南省人のものが 50 種、他省人のものが 24 種、部分廃棄すべき他省人の著作が 11 種あげられている（四庫 1391 頁）。本省出身者の禁書を別枠にしてリストアップするのも異色であり、しかもその数が他省人のそれを上回っているのが、如何にも湖南省らしい。

しかし不思議なのは、湖南省の出版業は盛んではなかった点である。なぜなら湖北、湖南両省の民間に版本は無く、書籍は江西省から流入すると言われているからである（四庫 1803 頁）。これが概括的な発言にすぎないことは明らかだが、『清代文字獄档』『陶煊張燦同輯国朝詩的案』を見ると、あながち極端な概括でもないことが判明する。

『国朝詩的』とは、寧郷県の監生である陶煊が、大理少卿にまでなった湘潭県の張燦とともに編纂した各省人士の詩集のアンソロジーである。康熙 60 年に刊行され、府県志にもその名が掲載されていた。

ところが刊行から 60 年近い乾隆 43 年に、本書に悖逆屈大均の詩があることが発覚する。陶煊は雍正 6 年に亡くなっていたので、子供である監生の陶士修を追及したところ、同書の不全本 26 冊、版本 1283 塊、毀損した版本 15 塊を提出した。最終的にこの事件は、『国朝詩的』は廃棄するものの、関係者はお咎めなしということで落着する。

ここで注目すべきは版本の数である。版本は普通一塊の裏表を彫るので、本書は 2600 葉ほどの巨冊となる。それではこの版本が湖南省で彫られたのかというと、そうではなく、陶煊が江南で彫らせ、印刷した『国朝詩的』とともに持ちかえたのである。これは、湖南省において書籍は揚子江を遡って流入してくるという指摘そのままである。

隣の湖北省も似たりよったりであった。湖北省黄州府黄梅県の監生石卓槐は、自分の詩集を刊行するに際して江西省に出向き、そこで版本を彫らせ 34 部印刷して帰ってきた（文字獄 418 頁）。湖北省も書籍は、書賈が揚子江下流から持ってくると言われている（四庫 637 頁）。これも、黄梅県から江西までは遠くないという地理的な理由だけによるのではない。

以上からすれば、湖南省、湖北省ともにめばしい出版業が成立していなかったと考えるのが整合的である。現地に旺盛な出版業が展開しているのならば、書籍は現地で発行されるはずであり、わざわざ江南や江西に出向く必要はないといえる。

全国的に見て出版業が盛んであったと言い得るのは、江浙、江西であり、つけ加えるならば福建、広東であった。これらの地域で出版業が成立したのは、そこが豊かだったからである。出版とは費用のかかるものであって、資金が潤沢に無くては不可能であった。以下、出版にどれくらいの費用がかかるのかを推定する。

内府の出版費用については、『陶氏書目』の『武英殿造辦处写刻刷印工価等定例』が経費の一覧をのせ詳しくわかる<sup>1</sup>。また『佩文韻府』106 巻について、詳しい史料が残されている（四庫 214～215 頁）。よって先ずこれらから出版経費を推定してみる。

出版工程は、「刊刻」（版下・刻字）「刷印」（印刷）「裝潢」（製本・装丁）から成る<sup>2</sup>。版下・刻字から述べると、版本は梨板か棗板かといった素材の如何、大きさによって値段がつき、且つ時価で変動する。『纂修四庫全書档案』では、梨板一塊 4 錢 5 分というが（31 頁）、この価

格のものは『武英殿造辦處写刻刷印工価等定例』には見当たらない。『韻府』は版框が縦17.1 cm、横11.7 cmなので<sup>3</sup>、長さ1尺寛さ8寸厚さ1寸の梨板を使うものとする。価額は一塊1錢5分2厘である。

版木を入手したならば、版下を書いて彫っていく。版下写字費は毎百字2分、刻字費は毎百字8分、計毎百字1錢である<sup>4</sup>。『韻府』は10行25字あるので、版木の一面で5錢となる。版木は、内府では普通は一面しか使わなかったようであるが<sup>5</sup>、世間的には表裏2葉彫るのが普通である。よってここでは2葉彫るものとして毎塊1両とする。それに版木代1錢5分2厘を加え、小字分を勘案して多めに切りのいい数をとって1両2錢とする。これが版木1塊に必要な諸経費である。これに一卷の葉数の半分をかけ、それを全体の印刷部数で割れば、一卷あたりの刊刻関係経費が出ることになる。

刊刻したら次は印刷、製本である。『佩文韻府』の売価は、台連紙に印刷したものが11両6錢2分9厘、竹紙に印刷したものが12両4錢6分である。うち台連紙本について内訳が判明し、紙張・工価銀が9両5錢4分8厘、耗餘銀2両8分1厘となる。利益は贏餘銀と呼ばれているので（四庫205頁）、耗餘銀とは、諸経費と利益の合算であろう。

ただし以上の金額を渡すだけなら、印刷した紙をくれるにすぎない。製本・書套費は別途で、上等（「精緻者」）が20餘両、普通が10餘両である。それらを含めると、帙入りの『佩文韻府』が一セット20～30両という。製本・書套費は、1巻あたり1～2錢である。

はたしてこの売価に、版木関係の諸費用が含まれているのかどうかは判明しない。ここでは含まれていないと仮定し、25両で『佩文韻府』106巻を買ったとする。1巻当たりの価格は2錢4分である。これに刊刻関係の経費を加えたのが、1巻あたりの出版経費となる。

1巻の出版経費＝1両2錢×1巻の葉数÷2÷部数＋2.4錢

『佩文韻府』自体は、信じ難いことに1000部以上刷っていたが、普通はそれほど刷らない。湖北省の監生石卓槐は、自分の詩集を34部刷っているので、ここでは一卷40葉、40部刷ったとすると、一卷の経費は8錢4分となる。以上が北京において本を出版する際の費用の推定である。

一方江南における出版はどうであろうか。乾隆2年、嚴鑾が亡き父嚴虞惇の文集を出版するに際して刻工と交わした金額が100両という<sup>6</sup>。『嚴太僕集』は12巻に序、目録、墓表がつく（内閣文庫蔵）。ここでは上と同様巻数だけで考えると、1巻あたり8両3錢かかったことになる。はたしてこれに製本費用が入っているのか、何部刷ったのかは不明である。よって以下は全くの仮定となるが、製本なしで40部刷ったとすると一卷2.1錢となる。これに製本・書帙費を1.5錢と考えて加えれば3.6錢である<sup>7</sup>。

以上ともに推定に推定を重ねた議論であるが、地域によって出版費用がかなり違うことが理解される。しかし江南なら安上がりなのかということそうではない。『嚴太僕集』の蔣廷錫序によると、孫の萊州府知府嚴有禧が出版しようとしたが、資金不足で（「力之不足」）、とりあえず詩・古文だけを出版したという。百両が安値と言い難いのは当然である。

ここで出版経費について安く見積もり、版刻から製本まで一切込みで毎巻2錢とし、

書籍の出版経費＝2錢×巻数×部数

なる式を考える。すると10巻本40部で80両となる。これは、黄丕烈が宋版の『列子』と『新序』を自ら大馬鹿者（「癡獃」）呼ばわりして買った値段と等しく、かなりの価格と言うべきである（『鉄琴銅劍樓藏書題跋集録』巻3、冲虚至德真經八巻）。時代は清末に下るが、張之

洞が『書目答問』『勸刻書説』で、金持ちの慈善家で人徳も学問も人並みだが、名を後世に残そうと思うならば、古籍を刊刻するしかないと主張しているのは、出版が金持ち（「有力」）でなくては叶わないからである<sup>8</sup>。

書籍を出版するということは、出版者がそれだけの資金をもっていなくては不可能である。また、出版業が成立しているということは、地域がそれだけ豊かであることの証拠である。湖北省、湖南省の出版業が弱体であったのは、地域が豊かでなかったためである。富豪が何人かいるだけでは、出版業は成立しない。それより更に辺境の陝西、貴州となると、出版業が成立する条件は社会的にほぼないと言ってよい。このような貧しい土地で恒常的に出版できるのは、官衙しかありえない。書局が出現する所以である。

## 二 出版が生み出す権威

このように出版には、多大な経費がかかる。そのような条件下で営利出版を行うのは、如何にして資金を捻出するか、回収するかということを考えると、かなり難しいことが理解される。乾隆34年、北京琉璃廠の新刊書店で売っていた新刊書（「新書」）は、製本・紙質が良くなく本も薄っぺらであったという（李文藻「琉璃廠書肆記」孫殿起『琉璃廠小志』第三章所引）。これは、清代の書坊はこのような安物を出版する程度の資力しか持っていなかったことを示す。近人の黄裳も、清刻の優品は、大半が書坊の品ではないという（「清刻之美」『清代版刻一隅』齐鲁書社、1992年、424頁）。明代の書坊が士人と結託し、豪華本を出版するのとは大違いである<sup>9</sup>。

そうとなると、安物でない然るべき書籍の出版は、「有力者」（金持ち）の家刻（自費出版）となる。そして家刻本を出したい「有力者」は常にいる。彼らは、書籍の出版に金銭的利益ではなく社会的威信を求めているからである。湖南省における著述・出版の隆盛はまさにそれであって、彼らは出版費用の回収は期待していない。出版が権威性をもつのは、それが本来権威を求めている非営利的な行為だからである。

しかし単に自費出版するだけでは、十分な権威を獲得できない。著者は、書籍を出版することによって、自らの周りに人々をひきつけねばならないが、それには条件がある。乾隆年間において、その成功例はどのようなものであったのか。このことを、斉周華（1698 康熙37～1767 乾隆32）の出版活動を手がかりに考えてみる。彼については、『清代文字獄檔』『斉召南跋斉周華天台山遊記案』およびその著書である『名山蔵副本』（上海古籍出版社、1987年）、附録の周采泉・金敏編「斉周華年表」に詳しい。

浙江省天台県の生員であった斉周華は、雍正8年12月19日、呂留良事件の処遇に関連して下された、生員監生で意見ある者は学政を介して具申せよという上諭に従って上疏を試みる。しかしこれは、県の訓導、省の首脳部に握りつぶされ、彼は北京に赴き刑部に告発する。事案が浙江省に差し戻されると、巡撫・学政は彼を充軍とし、刑部が獄中に永遠監禁することを提議して認められる。当然生員は革退である。乾隆元年の恩赦で釈放されると、全国の名山、名勝に遊歴に乗り出す。乾隆21年、長男の斉式听によって湖広の武当山から連れ戻されると、それまで書き溜めていた文章を、杭州の刻字匠周景文のもとで刊刻する。『名山蔵副本』二冊を刊行したのが乾隆26年であり、それ以外にも『諸公贈言』一冊、『半山学歩』一冊、および呂留良問題への上奏である「独抒己見疏稿」を刊刻した。他に著述が12種類あったという。

乾隆32年、巡撫熊学鵬に『名山蔵副本』他の刻書を献呈して序文を求める。熊学鵬は、そ

の内容に廟諱御名を避けないなど権力を権力と思わない態度（「悖逆謬妄」）があるのに気づき、大逆罪で凌遲処死に処すことを上申する。これによって彼はその生涯を絶たれる。

出版の観点からすると、民人にすぎない斉周華がなぜ著書を自費で刊行できたのか、その資金源はどこにあったのかが問題となるが、これは『文字獄档』に、「産を変じて集を刻せんと欲するに因り、その妻子屢次勸阻す」とあるように（文字獄 139 頁）、手持ちの田産を切り売りしたのである。彼にそれなりの田産があったことは、堂弟の原任礼部侍郎齊召南が、祖父から 68 畝の田地山塘を残されたことから推測される（文字獄 155 頁）。均分相続の原則からすれば、堂兄である斉周華の系統にも同等の田産が譲られたに違いない。事実康熙 55 年の飢饉時には、斉周華の父親が粥や棺桶を施し、門前は市場のような有様であったという<sup>10</sup>。これは、資産がなくてはできない行為である。

端的に言って斉周華は、エキセントリックな老資産家であり、日頃から族人を訴えたりする一族の鼻つまみ者であった。田産を切り売りしてまで出版に邁進することには、当然妻子から強い反対があった。しかし彼は妻子を追い出し、城外に一人住まいしてまで出版を敢行する。斉周華が自費出版に執念を燃やしたのはなぜか。それは、出版が広く社会的名声をかちえる（「博取虚名」）ための手段だったからである（文字獄 152 頁）。

そもそも彼は、呂留良案のために有名人となった。彼の禁固については、雍正帝の上諭に応えようとしたにもかかわらず、事を大きくしたくない省当局者に阻まれたという理解があり、「巨山（斉周華の号）は当時義勇のために禍を招いた」とか、「冤罪を晴らすところが無かった<sup>11</sup>」とか肯定的に評価される。しかしこれらは後の評であって、禁固中は当然のことながら賛否両論あった<sup>12</sup>。釈放後彼が全国遊歴に出かけたのは、ほとぼりが冷めるまで天台県から逃れる意味があったのは間違いない。

ところがその遊歴の場において、彼は「山水靈異の郷を極め」た「奇士」としての名声をかちえてしまう。同時にその文章も、「また遂にその人と並び奇なり」と評される<sup>13</sup>。人と文章は一体である。ここに彼は、著述・出版に執念を燃やしだす。

士人としてこの世に生まれたからには、著述によって名をあげようと思うが（欲著述以立名）、これを言うのは難しい。（『名山蔵副本』「諱名復名説」）

彼は、生員でないのだから士人ではない。しかし士人気取りで、周囲の反対をものともせず著述・出版に邁進する。実は『名山蔵副本』以前にも、『初学集』『需郊録』を出版している。しかも『需郊録』の版木が摩滅したと言っているからには<sup>14</sup>、かなりの部数を刷っていた。なぜこれほどまでに一民人の文集が印刷されねばならなかったのか。

『名山蔵副本』の各文には、挙業書よろしく名士の論評が載っており、彼には固定ファンがいた。刷られた文集は、彼らが知人に配布していた。たとえば楊繩武（康熙 52 年進士、翰林院編修）は、乾隆 6 年、李紱（康熙 48 年進士）が江南郷試の主考官として江寧に来た時、『初学集』『需郊録』を手渡している。これは、後日本人が訪問するための伏線である。その結果李紱は、彼のために「天台山人諸集序」を書く。

もう一つは、斉周華が遊歴先の各地で名刺代わりに自著を配っていた。貴州に向ったときには、楊匯に『需郊録』『初学集』『半山学歩』『黔行賦』『苗疆竹枝詞』を手渡している。それに対して彼は、「送天台山人游五嶽序」を書いて与える。二人は以前試験官・学生の関係だった。また、詩賦の才によって乾隆帝の覚えめでたい沈徳潜（乾隆 4 年進士）にも時文集である『半山学歩』を手渡している。これは、沈徳潜が堂弟の齊召南と旧知の間柄であったため<sup>15</sup>、齊

周華はそれを伝手に訪問したのである。沈徳潜は「半山学歩序」を書き、斉周華を徐霞客になぞらえ絶賛した。

僅かな伝手を頼りに、一流の士人と面会する。これこそが彼にとっての「立名」(名をあげる)の第一歩である。ここで会うだけならそれで終わりであるが、著書があれば序文を書いてもらうことができ、それが著書に箔をつける。著書は、著者その人である。著書が評価されるということは、著者が評価されたことに等しい。

詩文が世に出るに当たっては、必ず名のある士人(「名儒鉅卿」)に評価(「品第」)して序を書いてもらうように頼む。そのようにして始めて名は重んぜられ価値もつき(「名重価高」)、洛陽の紙価も高まるというものである。(「名山蔵副本凡例」)

これに続けて彼は、自分は誰が名儒鉅卿であるか知らないなどと嘯いているが、『名山蔵副本』には、彼の著作への序文集である「諸公贈言集」が附録としてつけられていた。そこでは多くの名士が彼の人となり絶賛している。「諸公贈言集」こそ、自分が一介の民人ではなく、士人の実を備えていることの証拠である。

私が見るに、古来の文人君子は、実があってこの名があるのである。もし実が無くて名を好むのならば、しばらくして馬脚をあらわさないものはない。(「諱名復名説」)

生員を革退させられたにも関わらず、彼が士人気取りでいられたのは、名士が自分に文人・君子としての実質があることを保証してくれたからである。彼らは、一流の士人であるがゆえに、その鑑識眼(「品第」)に狂いはない。ここに彼の周りに人が群がってくる。名士による彼の人物に対する肯定的評価こそが、斉周華が社会に行使できる力の根拠となる。彼はここに人的権威を獲得するのであり、これが彼の社会的影響力の源泉となる。

その圧倒的成果は、呂留良案は斉周華にとって謂われない仕打ちであった、との評価を定着させたところにある。彼が『名山蔵副本』に禁固中に弟に出した書簡(「獄中寄胞弟個人芾棠書」)、禁固の原因となった上疏(「天台斉周華救呂晚村先生悖逆兇悍一案疏」)を入れたのも、ほとぼりが冷めたという消極的な理由より、もはや批判されることはないという積極的な自信の然らしむところである。なぜなら書簡に附された各人の評に、「忠義之士」「巨山之患難」「理直受屈者」とあり、彼の周囲が禁固冤罪論で固まっていたことがうかがえるからである。彼は、呂留良案の痛手から立ち直った。このような同情票が優勢となり、理解者が集ってきたのも、ひとえに名士が彼の人間性を保証してくれたからである。

自分を中心に一流の士人と交流し、交流をもった士人は彼を高く評価する。交流の契機として、著書の存在は重要であった。しかも交流の範囲を広げるほど人間性を肯定する者が多くなるとなれば、著書は必ずや大量複製し、多くの名士に手渡さなくてはならない。そうすれば名士は、「その文もまた遂にその人と並び奇なり」といった楊繩武のように、文章が自分の分身であることを理解してくれるであろう。しかし全ての名士に手渡すのは無理であるから、次善の策として販売されねばならない。ただしその場合は、名士が序を書き、自分に士人の実があることを保証してくれねばならない。そうであるならば、著書の出版・販売は、自らの権威を受け入れる者を広げるための有効な手法となる。

彼は、世間と名声を争うべきではないという批判に対して、自分が書くような遊記が誰と争うと言うのか、もし書肆の中に並んでいることをもって争うと言うのなら、史部書と經部書は争っているのかと反論している(「諱名復名説」)。ここに彼の著書が本屋に並んでいたことが明言されている。

しかしどうやら彼は、自分の実力を買いかぶりすぎていた。且つ時勢を読むのを決定的に誤った。訴訟を乱発し、肉親・一族の者から敬遠され、事実上孤立していたこのエキセントリックな老人は、乾隆32年10月24日、財務調査のため天台県を訪れていた巡撫熊学鵬に著作を贈り、一転「悪類」と決めつけられてしまう。

彼はその時、『名山蔵副本』『諸公贈言』『半山学歩』を渡し序を求めた。さらに「独抒己見疏稿」および訴状・告発状も提出した。訴状・告発状はともかく、疏稿の贈呈は、呂留良案による禁固が、逆に名誉と考えられていた論調の広がりを見込んでいたとありえない。

しかし熊学鵬は、これらを「悖逆謬妄」と判断した。その理由は、直前の同年五～六月に松江府で間漁間録案が起きたことと関係がある（文字獄123～135頁）。この事件では、華亭県の挙人蔡顥が著書『間漁間録』を悖逆と判断されて斬罪に処せられ、両江総督高晋らも批判された。呂留良案は30年以上も前のこととはいえ、隣の江蘇省で悖逆案が起きてしまえば、逆犯呂留良を擁護する言説を刊刻・配布している者がいるのは不都合である。熊学鵬としては、乾隆帝に摘発されるよりは、問題を公にして自ら解決した方がリスクは少ない。されば斉周華を悖逆と決め付ける必要があった。

ここに乾隆元年以来営々として築き上げてきた彼の名声は、一挙に暗転した。彼の権威は、名士からの人物評に基づいていたため、評価が逆転すれば一気に失われる。事実「半山学歩序」を書いたはずの沈徳潜も、斉周華など知らぬと言い張り、序文は偽作であると主張する（文字獄142頁）。その挙句彼は刑場の露と消えたのである。

当時の社会において書籍への評価は、著者への評価と同等であった。著者その人を代替するものとして書籍があったともいえる。しかも著書への評価は、名士のそれが基準となる。人々は、名士がどう評価を下すかを注視し、それによって著者との関係を設定した。

そもそも沈徳潜も一朝にして権威を喪失した経験をもつ。これも書籍がらみである（四庫566～567頁）。沈徳潜、康熙12年生、蘇州府長洲県人、乾隆4年進士。詩賦の名手として乾隆帝の覚えめでたかったが、乾隆14年以後は老齢のため故郷で暮らす。彼は、清人の詩のアンソロジーを編纂し、『国朝詩別裁集』と名づけて乾隆24年に36巻本として出版した。これは門人の蔣重光が経費を負担した。

本書の出版で指摘すべきは、乾隆帝からその詩才を評価されていただけあって、その需要には凄まじいものがあったことである。そのため本書は、親しい関係者（「親友」）に送った以外、書坊にも販売されることになった。25年の重刻本の沈徳潜識語によれば、広東、江西で翻刻本が出たという。都合何部出たのかは不明だが、少なくとも数百部は確実に出ている。沈徳潜の権威にこれだけの人々が群がってきたのである。

ところがこの初刻本は校正に不備があり、収録人数も狭かったため、翌25年に沈徳潜自ら改訂して、門人の翁照、周準と32巻本を出版した（沈徳潜識語）。しかし不備は、重刻の理由の一つにすぎないに違いない。彼は、翌26年、皇太后の七旬万寿のために北京に赴かねばならなかった。そこで本書を乾隆帝に献呈しようと考え、改訂する必要があると感じたのである。沈徳潜は乾隆帝に序文を求める。しかし帰ってきたのは、思わぬ批判であった。

沈徳潜が本朝人の詩のアンソロジーを作り序を求めたのは、本書に華を添えるためである。徳潜も老いたものだ。そもそも彼は詩文で朕の知遇を得たのだから、頼まれたら許さないわけにはいかぬ。本書を進呈したのでざっと見てみると、巻頭に並んでいるのが錢謙益たちである。朕の序を求めないのであれば不問に附すことも出来ようが、朕の序を求めたか

らには、永遠の公論がここにかかっている。一言いわざるを得ない<sup>16</sup>。

この後は錢謙益批判が繰り広げられ、「本書が出て、徳潜の一生の学問の名声は台無しとなった。朕は徳潜のために惜しむ者である」と痛烈に批判する。結局本書は、不都合な点を翰林院で改め、一連の批判を御製序として内府で出版することとなった<sup>17</sup>。

沈徳潜による『国朝詩別裁集』の出版も、斉周華の出版と同じ過程をたどった。彼は、序文を求めることによって華を添えようとし（「以光其集」）、乾隆帝は厳しい評価を下す。それは、沈徳潜その人に対する批判に帰結する。著書に対する評価は、著者その人に対する評価と同じである。沈徳潜は蘇州に戻ると、翌年正月、蔣重光とともに版木を廃棄した。

その後の彼は愛顧を回復し、乾隆34年に97歳で死ぬ。乾隆帝は「寿縦未能臻百歳、詩当不朽照千秋」との哀悼詩を作ったという。しかし『国朝詩別裁集』が、彼の人生に汚点を残したのは間違いない<sup>18</sup>。

### 三 人的権威としての書籍

以上見てきたように、威信を求めての自費出版は、書籍を進呈するのが普通である。斉周華、沈徳潜は、一部書坊に流していたが、これは本来の姿ではない。あくまでも知人に手渡すというのが正道である。されば普通初版部数は、意外なほど少ない。たとえば黄梅県の監生石卓槐が自分の詩集を34部、山西按察使黄検が、祖父黄廷桂の硃批奏摺を20部印刷している（文字獄388頁）。黄検は、それを巡撫、布政使などの同僚に進呈しており、どれくらい刷ればいいのかは見当がついた。印刷するには紙代、刷り代がかかり、それに加えて製本代もかかるのであるから、むやみに刷るのは無駄である。

しかし書坊による営利出版は、不特定多数を相手にするため、刷り数の目算はたちにくい。しかも多額の出版経費を考えると、そもそも売れるのかどうかを見極めなくてはならない。売れない本を出版しては、書坊の存立に関わる。このリスクを回避するためには、いくつかのやり方がある。第一は、広まった実績のある書籍に売れる工夫を凝らして翻刻することであり、第二は、出版経費の節減である。前者は『名法指掌』にうかがえる。

『名法指掌』とは、清律の構成要件を一目瞭然となるよう図示したハンドブックである。作者は沈辛田、字畊予、浙江省烏程県人、貢生。彼は、雍正12年に雲南へ幕友として赴き、本書の稿本を完成させた。それを見た幕友仲間は、争って鈔写したという。

乾隆5年、彼は父親の埋葬のために帰郷するに当たり、広南知府陳克復から出版費用を援助された。そこで内容を増補して出版する（自序）。これが家刻本の『名法指掌』で、陳克復の序と自序が附せられていた。その後彼は、広西按察司の幕友に赴く。

この家刻本に乾隆8年、名法指掌増訂2巻、同徳堂刊、4冊なる翻刻本が現われる（国会図書館蔵）。同徳堂とは、封面に「烏程沈辛田先生纂輯／名法指掌／同徳堂梓行」といい、沈辛田を先生呼ばわりしているからには書坊である。原本の出版から三年たっているが、その間評判をうかがい売れると判断したのであろう。

一方同年、沈辛田も広西の地で増補本を出版する。名法指掌増訂2巻附刻便覧1巻蓮西草堂蔵板で、布政使唐綏祖と按察使李錫秦の序を附す（東京大学東洋文化研究所蔵）。『名法指掌』は、この広西本がでたために、決定的な評判をかちえることになる。

本書は、内容的には稿本、家刻本の段階で十分評価されていた。李錫秦は序の中で、按察司衙門で『名法指掌』を見たが、誰もが手に入れたがるのも当然であると言っている。しかし沈

辛田が家刻本を進呈しているだけでは、流通に限界がある。その点では同徳堂本が重要であるが、律例という特殊な専門書は、そもそも売れることがあまり期待できない。李錫秦が「皆思得一帙」と言う際の皆とは、按察使が想定する皆、すなわち知県・知州、幕友など律例を職務上必要とする者たちであって、一般的な皆ではない。

律例が一般読者の関心事でなかったことは、当時の大蔵書家黄丕烈が、元鈔本刑統賦疏の題跋で、本書は、もとの所有者が題簽に律例としか書いていなかったため、誰も貴重と思わず我が手に帰したと自慢していることから伺える（『鉄琴銅劍樓藏書題跋集録』卷三）。李錫秦も、沈辛田を紹介するに当たり、沈先生は明経の髦士で挙業に巧みであるが、名法も究めていると言ひ、律学は余技と言わんばかりの書き方である。初学者の読書案内である『書目答問』に至っては、律を一切載せない。このように律例の註解などは、真っ当な著書とは思われていなかったものであり、一般人が買う書籍ではなかった。このような特殊な本を購入する層がそれなりにいて、且つそれを出版するだけの出版業の広がりのある地域といったら、紹興師爺の生地である浙江省ぐらいである。事実『東京大学東洋文化研究所大本文庫分類目録』の清律注釈書の部を見ると、浙江省出版の本がずらりと並ぶ。

されば李錫秦は、増補本を官衙で出版することを決意する。そもそも広西省は、省都桂林でさえ書坊が三軒しかなかった（四庫49頁）。出版業は論外というべきである。このような辺境の地に江浙で出版された律例の註解が多数流入してくることは絶対ありえないのであって、官が自発的に出版しない限りは、実用書でさえ事欠くのである。

『名法指掌』が、広西省当局によって出版されたという事実は、本書の評価に圧倒的に有利であった。家刻本には自序と知府序しかなかったが、今回はそれに加えて布政使、按察使序がついたからである。高官の推薦を得て本書に対する評価は、高まらざるを得ない。

果たして直後に書坊の翻刻本が出現する。翌乾隆9年、北京の榮錦堂が増訂刑錢指掌4巻を出版し（国会図書館蔵）、同年、立て続けに黄叔琳の序を附した版を出す（東京大学東洋文化研究所蔵）。翌10年には、版元不明ながら重鐫本がでており（国会図書館蔵）、爆発的に売れていることがわかる。本書は、そもそも売れるだけの内実を備えていたが、需要の喚起において榮錦堂の果たした役割は絶大である。

榮錦堂とは琉璃廠にあった書坊である。乾隆34年の状況を記した李文藻「琉璃廠書肆記」にも名前が現われ、後世言うところの搢紳店、すなわち官僚相手の専門書店である。李氏は、宝名堂なる書坊について、「本売仕籍及律例路程記」といい、職員録、律例、交通案内といった官僚にとっての実用書を買っていたことを紹介する。榮錦堂の営業内容も同様であろう。北京は、中央官僚がいるのは勿論、引見や様々な業務で地方官僚が集り全国に散っていく場所で、搢紳店はそのような官僚を顧客としていた。されば榮錦堂が広西本『名法指掌』に目をつけたのは当然である。またその販売戦略も上手い。すなわち売れ行きがいいと見るや、次の版では黄叔琳に序を書かせて、更なる評判を喚起したからである。

黄叔琳、字昆圃、順天府大興県人。康熙30年20歳の時、進士に榜眼で合格した。彼は、当時の大学者であって、面識の有無に関わらず、誰もが北平の黄先生と呼んだという（『国朝先正事略』卷10）。なぜ彼が『名法指掌』の序を書いたのかその経緯は不明であるが、榮錦堂には彼を引き出すだけの実力があった。黄先生序の権威は絶大だったはずである。

ここに『名法指掌』は全国に名をとどろかすに至る。しかしこの種の実用書は、律例の改訂を反映して増補を続けていかなくは内容が古びてしまう。黄叔琳序の附された『名法指掌』

の凡例にも、本書は乾隆5年夏季までの規定に基づくので、将来変更があれば改訂するとある。しかし沈辛田は増補本を出版することはなかった。これは、彼と榮錦堂の間に直接の関係がない以上、仕方のないことである。されば坊刻本も、乾隆10年に重鐫本が出た後は、出版されることはなかった。本書の復刊は、道光年間まで待たねばならない。

このように書坊は、売れるかどうかを慎重に見極め、売れると見るや一気呵成に販売攻勢をしかける。その際に重要なのは、誰が序を書いて推薦しているかである。足りなければ、更に誰かに序を書いてもらう。そうすると推薦者の威信が本に乗り移り、俄然人々の購買意欲をそそる。著者の名声に不安があれば、ゆるぎなき名士の序文をつけて、著者・書籍ともに箔をつけてあげればよいのである。

第二のリスク回避策は、出版経費を節減することである。こうすれば、万が一売れなくても被害は軽い。経費節減のポイントは、版木、版下、刻字、印刷、紙張、製本、装丁といった各工程、必要物品ごとに存在する。たとえば、江寧の懷徳堂なる書坊の周学先は、広東省の刻字代が江南より安いので、そこで初刻本『国朝詩別裁集』の翻刻本を彫って江南に持ち帰り印刷したという（四庫574頁）。

また書坊は、安物の版木を使い経費節減を図っていた。各省から軍機処に送られてきた禁書の版木は、両面が彫られている上に、厚さが4、5分（1.5 cm 程度）である。高級品なら表面を削ってリサイクル可能であるが、これを削ると2、3分（1 cm 弱）となってしまう。武英殿の版木は厚さ1寸なので（『武英殿造辦処写刻刷印工価等定例』）、このような「市坊の薄板」は使い物にならない。よって版木18078塊は、粉碎の上、琉璃廠で薪とするとされた（四庫521頁）。

中古の版木もでまわっていた。家刻本を出した家の子孫が貧しくなるとそれを典売し、書坊が買いつけるのである（四庫1031頁）。『国朝詩的』で追及を受けた寧郷県の監生陶士儻も、『唐律分註』の版木を長沙の二酉堂書店に売却していた（文字獄352頁）。かの朱彝尊の『経義考』も孫の朱稻孫が売却し、杭州府の捐職大理寺丞汪汝璫（蔵書家刑部陝西司員外郎汪憲の長子）の元に版木2262塊を存するという（四庫590頁）。版木の売買は庶民レベルでも行われ、4塊を600文で典買したとの記事がある（四庫943～945頁）。

しかしこのように工賃の安いところを探し出し、安物を使うという手法を使っても、出版のリスクは大きかったはずである。孫殿起『琉璃廠小志』第三章には、「記廠肆坊刊本書籍」として、琉璃廠の書坊が出した書籍一覧をのせる。これが低俗な書を排除した真っ当な本の一覧であるのは明らかなが、これによると、大半の書坊の出版件数は数点であり、積極的に出版してはいない。されば真っ当な新刊書の出版は難しいのであって、低廉な俗書の出版販売に徹するのでなければ、江南のような出版・蔵書の中心地で新刊書・古書を買いつけて転売することになる。即ち本を専門にあつかう客商（「書客」）となるのである。

しかしこれもなかなか難しいものがある。如何にして売れ筋の本を見抜き、それを手に入れるか。宋元版といった古書になると売る方も買う方も真剣で、その間の事情は、瞿良士『鉄琴銅劍樓蔵書題跋集録』に詳しい。江南の古書店の主人ともなると、どこの蔵書家がどのような本を持っているか熟知しており、常日頃から蔵書家と親しく交際している。また、蔵書家、別の古書店から転売を頼まれることもある。如何に手広い人的ネットワークを構築できるか否かが勝負であった。

しかし宋元版の売買は例外的というべきであろうから、普通の新刊書の事例を探してみると、

『清代文字獄檔』『蔡顯間漁間録案』がある<sup>19</sup>。蔡顯は松江府華亭県の人、号を間漁と言ひ、康熙 36（1697）年の生まれ、雍正 7 年の挙人である。彼は、乾隆 22（1757）年以降、続々と自著を出版する。最終的に全部で七種あったという。その中に『間漁間録』があり、出版の経緯がわかる。

本書は、乾隆 32 年 3 月に聞子尚という刻字匠を雇って刊刻される。すると浙江省湖州の呉建千なる書客が、刻匠の馬とともに紙を持参して現われる。呉は 120 部印刷し、内 20 部を版木代と称して置いていった。蔡顯は、馬に酒代として一部渡し、版刻後に死んだ聞子尚の子聞声遠にも一部渡した。その後彼は、本書を松江の知人に配って歩く。そこで文言が狂悖であると告発されそうになったので、自ら自首してきた。

ここでの問題は、なぜ呉建千は蔡顯が新刊書を版木に彫ったことを知っていたのかである。これは宋元版を扱う大古書店と同様、彼が人的ネットワークを構築しており、そこから情報を得たと考えねば説明がつかない。蔡顯は既に六種類の著作を出版しており、周囲には門人を称する支持者たちが多数いた。しかも彼は、多数の著書を出版することによって遠くの者とも関係していた。彼は、地域の権威ある名士だった。

されば書客は、名士の著作活動には注意を払わねばならない。呉建千は、新刊書を手に入れて儲けようとしただけ（「実係図得新書、可以獲利」）と供述するが（文字獄 132 頁）、儲けとなる有名人の新刊書がそう彫られるわけではない。されば版木を彫ったと聞けば、直ちに赴いて印刷して売り切るのが肝要である。ぐずぐずしては、別の書客が印刷して売りに出るかもしれない。事実呉建千は、100 部の内 55 部を売り切っていた。版木が彫られたのが乾隆 32 年 3 月、事件の発覚が同年 5 月初であるから、二ヶ月でそれだけ売ったことになる。名士の著作をすばやく印刷して売り切ること、これこそ獲利の道である。

以上見てきたように書籍とは、人的権威の複合体だった。著者は己に権威あることを表現しようとするし、書坊は名士の新著を求め、名士の序文を追加して売りにかかる。買い手は、著者に本当に権威があるのかどうかを見極める。人的権威を中心にして、著者、書坊、買い手それぞれが活動を繰り広げていく。

庶民が営利出版に挑んでいる事例があるが、ここでも重要なのは書籍に付与された人的権威である。乾隆 43 年 10 月 20 日、河南省祥符県で表装屋（「裱褙舖」<sup>20</sup>）の劉義が、『聖諱実録』を売っているのが発覚した。本書は、清朝皇帝の諱、廟諱を楷書で記したもので避諱の手引きである。ところが、堂々と諱を大書しているのが不届き千万で、県当局は、ただちに版木 4 塊、本 7 冊を押収する。しかしなぜ表装屋が避諱の手引きを売っていたのか。当局の調査によると以下のような経緯があった（四庫 943～946 頁）。

もともと本書の版木と書籤は、郷試や院試の合格通知を生業としていた馬均璧が所有していた。彼はそれをどこかで買い求めたのである。乾隆 20 年馬は、同業の李伯行に「試験で避けねばならない字は全部本の中に書いてある。受験生は誰もが買わざるを得ないから、本は 10、20 文で売れるだろう」と持ちかけ 600 文で典売する。李は版木を劉義の祖父の劉振のもとに持ち込み、印刷製本して試験時に売りだした。その後乾隆 26 年に馬が病死し、版木は贖回されずに終わる。28 年には李が失明し、劉振の工賃 500 文が未払いだったため版木で代納する。劉義は、それを使って印刷、販売していたのである。

このように馬均璧、李伯行は使い走り（「走脚」）、劉振、劉義は表装屋であって、出版は本業と無関係である。しかし、本が売れると見てとるや、彼らは参入してくる。その時の根拠とな

るのが、本書の内容であり、それに附された人的権威である。

歳試の時には、受験生目当てに書賈が集ってくるという<sup>21</sup>。別に歳試に限らず試験のある時には、避諱の手引きたる『聖諱実録』は売れるであろう。しかし試験時に多くの書賈が集り、多くの本が売られるとなれば、内容だけで受験生をひきつけるのは力不足である。そこで本書には、麗々しく「世宗憲皇帝の旨を江右の藩幕に得、因りて本朝の世代の聖諱実録を集め、剞劂に付して天下をして皆尊崇を知らしめんと欲す」と書いてあった。これをみれば、どうみても本書が江西省布政使の幕友の手になるものと思えない。この惹句が本書に権威を賦与したのは間違いない。

ただし馬均璧らが得た利益がどの程度のものであったのか。馬均璧の子供である馬貴は、子供の頃に靴屋に徒弟に出されて家にあまりいなかったため、父親が本を売っていたことは知らなかったと証言する。さればそれは、知らなくても不思議でないほどの利益であった。版本4塊であるから、全体で8葉16頁の小冊子である。10文、20文という安値も相応である。しかも内容が特殊であるから、受験生以外の需要は期待できない。されば本書の出版・販売が、彼らにサイドビジネスと呼べる程の利益をもたらしたとは考えられない。せいぜい小遣い銭稼ぎというべきである。しかし、人的権威をうまく使えば、庶民にとってもこの程度の小遣い銭稼ぎができたのも事実なのである。

## 結論

以上、書籍が人的権威の反映であることをのべてきた。逆に言うと、人的権威を反映していない書籍は、受け入れられにくいということでもある。書籍ではなく図像を売っていたケースではあるが、『清代文字獄档』に「李浩結盟安良二図及孔明碑記図案」がある。

乾隆33年8月4日、浙江省温州府瑞安県で福建省閩県の李浩が拏獲された。彼は、福建省漳浦県の逆犯盧茂らの結盟図、懲匪安良図、孔明碑記といった刷り物売り歩いていた。宿からは、版本三塊も発見された。当局は次のような事実を調べ上げる。

李浩の本職は轎夫であった。乾隆33年6月、泉州に着いた彼は、見知らぬ者が盧茂等結盟図、懲匪安良図を売っているのを見る。彼は、一月あまり売っているが売れないので版本を譲りたいという。そこで李浩は、160文で版本2塊を買いこむ。

同年7月、閩県の都統衙門の西に住む王三哥が、広東省石城県の東山寺から孔明を描いた碑文が出現したと触れ回り、その経緯を手写して売りさばいていた。これをニュース（「新聞紙単」）という。李はそれを一枚手に入れると、刻字匠傅阿を雇い、石碑と諸葛孔明の図を描き、字句もひき写した版本1塊を雕らせた。傅阿は、安良図、盧茂等結盟図、正徳図も刊刻させたと証言するので、泉州で手に入れた版本はもはや使用に耐えなくなっていたらしい。工賃は都合320銭、つまり版刻一件につき80銭である。李浩は、その後浙江に向いニュースを販売しようとしたところを、拏獲された。

結局二ヶ月あまりのニュース売りでどれほど儲けがあったのかは不明だが、前の版本の所有者が一ヶ月ねばって売れなかったというのであるから、李浩が成功したとは思えない。彼が浙江に向ったのも、場所を代えて出直すつもりだったのであろう。

一方うまく売り抜けた者もいた。陳培培の供述によると、5月に漳州城外で見知らぬ者が安良図のニュース（「新聞」）を売っていた。彼はそれを銭1文で買くと、福州に帰って李清に見

せた。李清はそれを刻字匠の施侯三に彫らせて印刷し、子供の李義に街頭で300枚あまりを売らせ、280枚あまりを売りきった（文字獄188頁）。

一体李浩と李清の成功失敗は、どこに分岐点があったのかは不明である。しかし人的權威なしで売るのは、リスクが大きかったであろうことは理解される。爆発的に売れるかもしれないし、全然売れないかもしれない。そしておそらく後者の方が普通だった。どうしても必要ならば別だが、買い手にそれを買う判断基準が示されないからである。人的權威は、人々が行動するときの判断基準を与える。されば、書籍を売ろうとするならば、書籍に何らかの人的權威が表現されていなくてはならない。

このように書籍が著者・発行者の人的權威の表現であるとすれば、乾隆朝における四庫全書の編纂が、究極的な權威者皇帝による權威の格付けに帰着したのも理解できる。このことは、『四庫全書総目』の凡例に明言される。

人品學術の醇疵、国紀朝章の法戒はまた未だ嘗て各々彰瘡を昭かにし、用って勸懲を著さずんばあらず。其の体例は、悉く聖断を承く。また古来の未だ有せざる所なり。

ここで人品の彰（善）瘡（悪）、勸懲という言葉が使われていることからすれば、四庫全書における格付けが何を意図していたのかは明白である。それは、『総目』巻首、乾隆42年10月7日の上諭に「ただ準ずるに大中至正の道を以て、万世の為に褒貶を厳しくす」とあるように、今までの學術・文学に対する乾隆帝からする「褒貶」、価値判断なのである。

なぜ彼がこのようなことを思いついたのかについては、別途説明する必要があるが、少なくともこれによって、著書を通じて權威を獲得した者を悪として膺懲する方策は手にすることになった。その最も顕著な対象が錢謙益である<sup>22</sup>。

乾隆帝は、錢謙益を「名を勝国に託し妄りに狂言を肆にした」と指弾する（乾隆41年11月17日上諭）。「妄肆狂言」とは極端な表現ではあるが、権力の別名である。彼はるか昔に死んではいるが、乾隆帝の寵臣沈德潜の『国朝詩別裁集』の巻頭を飾っているように、いまだに詩文の權威である。しかも彼の權威は、乾隆帝のそれを凌駕している。なぜなら沈德潜は『国朝詩別裁集』の凡例で、御製詩は「臣子の敢えて選ぶところに非ず」といい、事実上乾隆帝を棚上げにしてしまったからである。されば本書が出版されることによって權威を獲得するのは、錢謙益である。乾隆帝が激怒したのも当然で、これは權威の所在がどこにあるかという政治問題に関わる。乾隆帝は、詩の本質は忠孝とまで言い放つ<sup>23</sup>。この極論に、端無くも彼の文教政策の本意が透けて見えるというべきである。

一連の禁書騒動で明らかになったように、錢謙益はいまだに多くの人士が支持する權威であった。さればこの一大国家事業である四庫全書において彼は膺懲されねばならない。もちろん著書、編著は四庫全書に著録しない。存目にも名をのせない。しかしこのような消極的な否定では不十分で、積極的に鉄槌を下さなくてはならない。錢謙益が、朱彝尊『明詩綜』の提要で「記醜言偽の才」と痛罵され、その『列朝詩集』は「是非を顛倒し、黑白混淆し、公論に復するなし」と酷評されるに至ったのは、その実現に他ならない。

このように四庫全書の編纂については、出版史・文化史的な観点から理解するだけではその実態を捉えそこねるおそれがある。権力論からするアプローチは不可欠である。ただしこの編纂を、専制君主による恣意的な権力行使ととるだけでは単純にすぎる。乾隆帝本人は、あくまでも「大中至正」に行ったつもりには違いないからである。それでは四庫全書という一大出版政策を通じて追求されてきたこの「大中至正」とは何なのか。これが次に問われるべき問題として現れている。

註

- 1 これが何時の規定なのかは明言がないが、本書の最後に嘉慶年間の档案を載せるので、清中期と理解しておく。なお内府の出版の概説は、翁連溪「清代内府刻書概述」（『清代内府刻書図録』北京出版社、2004年）がよい。経費については、同書18～19頁に見える。
- 2 『欽定武英殿聚珍版程式』乾隆38年10月28日の金簡の奏摺に、「臣奉命管理四庫全書一応刊刻刷印裝潢等事」とある（1a）。
- 3 故宮博物院図書館・遼寧省図書館編著『清代内府刻書目録解題』紫禁城出版社、1995年
- 4 『武英殿造辦處写刻刷印工價等定例』41頁。『欽定武英殿聚珍版程式』でも、「每写刻百字工價銀一錢」という（2b）。
- 5 『欽定武英殿聚珍版程式』2bで『史記』の例を挙げ、版木2675塊各1錢および写刻字118万9000字、毎100字1錢とで経費1450餘兩とする。よって版木一枚当たりの字数は、118万9000字を2675塊で割ると444字となる。この値は一葉分と見るのが相応である。二面彫っている例は、翁連溪「清代内府刻書概述」27頁にみえる。
- 6 『鉄琴銅劍樓藏書題跋集録』（上海古籍出版社、1985年）巻2、資治通鑑、丁巳7月13日、8月12日、11月12日。
- 7 『嚴太僕集』は、全187葉で小ぶりであるが、写字刻字の見事な優品である。写字は徐敬輿の手になる（『鉄琴銅劍樓藏書題跋集録』39頁）。
- 8 盧文弨『抱經堂文集』巻20、与孔蕙谷書（乾隆45年）にも「古書之流傳者稀矣。全賴好古有力之士摹印流通、嘉惠後學」とある。
- 9 琉璃廠が栄えるのは、乾嘉以降のことである。会試で落第した江西人が店を開き、自ら書いた模範答案を印刷販売し、同郷人がそれに倣ったのである（『琉璃廠小志』16頁）。その出発点からして零細さが刻印されているといえる。孫殿起によると、学者の著作は、晩年に自ら出版するものでなければ、死後子弟・門人が出版するのであって、書坊が出版することは少ない。清中期になってはじめて名著の坊刻本も出るようになったが、数は多くなかったともいう（『琉璃廠小志』157頁）。
- 10 『名山藏副本』下巻、恤災記
- 11 『名山藏副本』附録、名山藏諸公贈言集、蔣棡之「半山學歩序」、缺名「風波集序」
- 12 『名山藏副本』下巻、獄中寄胞弟個人芾棠書、「在明哲之士、無不憂爾有兄、在忠義之士、無不樂我有弟。」芾棠は、年表雍正9年によれば、弟周蔭の字とする。
- 13 『名山藏副本』附録、名山藏諸公贈言集、楊繩武「天台齊巨山游草序」
- 14 『名山藏副本』下巻、遂初墓志銘
- 15 乾隆14年、沈德潜が老齡のため帰郷する際、礼部侍郎の後任に斉召南を推薦したという。『国朝先正事略』巻18、沈文愨公事略。
- 16 『清史列伝』巻19、沈德潜伝。
- 17 その結果巻頭には、慎郡王、溥瑞、德普といった満洲人たちが並ぶことになった。
- 18 死後の名誉剥奪については、『清史列伝』巻19、沈德潜伝にみえる。
- 19 孟森「間間録案」（『明清史論著集刊』中華書局、1959年）が詳しく紹介する。
- 20 裱褙とは、本来書画の表装の意であるが、明の沈榜『宛署雜記』巻15、経費、各衙門に、『大明会典』を重修する際の経費が記されており、そこに刊刷裱褙匠工食銀が計上されている。

る。製本の意味もあることが理解される。

<sup>21</sup> 『鉄琴銅剣楼蔵書題跋集録』巻三、習学紀言、黄丕烈題跋。

<sup>22</sup> 錢謙益については、岡本さえ『清代禁書の研究』56～57頁、380～385頁に詳しい。

<sup>23</sup> 『清史列伝』巻19、沈徳潜伝。『国朝詩別裁集』の顛末については、岡本さえ『清代禁書の研究』380頁、551～552頁にみえる。

本稿は、特定領域研究(A)「東アジア出版文化の研究」の成果である。